

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 563 号 ] 2009 年 5 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.563  
May 2009

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## Stuttgart から、Freiburg から

南吉衛牧師との交流会に参加して

松尾 茂春

3月16日、ドイツから一時帰国中の南吉衛牧師(シュトゥットガルト・パウロ教会協力牧師)を目白の練習場にお迎えし、美しい写真を豊富に駆使した興味深いお話を聞かせていただきました。プロジェクターで映写された写真は、どれも南先生自らがドイツ滞在中に撮影された貴重な映像からの抜粋で、前半は主にシュトゥットガルトの町と教会について、後半はドイツの教会全般に関するものでした。お話の中から、いくつか抜粋して記します。

パウロ教会について：南先生が牧会され、今夏の旅行での演奏会場ともなるパウロ教会は、450人収容の会堂をもちます。1945年の敗戦時、ドイツの各教会の建物も壊滅してしまいましたが、教会の再建ブームが起き、このパウロ教会もその再建時から60年に近い歴史を有するそうです。現在4000人、当時は10000人を超えるメンバーがいて、その登録人数に合わせてこの450人収容の教会が建てられたとのこと。美しい教会のステンドグラスの映像、牧師、役員、執事、南先生を支える会などの人々の写真も拝見しました。

町の様子から：シュトゥットガルトの目抜き通りに高い塔 ベンツのシンボルマークの広告塔があるそうです。

平和を考える場所

シュティフト(修道院)教会：ここにある彫刻には戦争で町の1/3が破壊されたことが記されています。破壊された建物の瓦礫の映像が映し出されました。小高い山の上にその石を運んだ結果、300mの山が200mほど高くなったといえます。この小高い山からシュトゥットガルトの町全体が見えますが、地形が盆地であるため、どんなに天気が良くても空気はよどんで見える、また町全体に緑が多いのが特長とのこと。山の上に十字架があり、そこで各教会の牧師が交代で礼拝をしています。戦争の悲惨さを忘れないために、町を見下ろす場所にあるのでしょう。

シュティフト教会の2つの塔の映像：その歴史的背景として、教会のトップと国家のトップの争いにおける財力の誇示があるとのこと。

マルコ教会：1948年にシュトゥットガルト宣言(平和についての宣言)の場所 200席ほどあり、戦争で破壊されなかったため、ここで行われたとのこと。

広場、公園、城、塔：パウロ教会(演奏会場)の隣の教会は尖塔の先の16mが戦争で破壊された姿をとどめていました。

銅像：近くの町マルバッハで生まれたシラーの銅像があります。

ドイツの教会全般

ミュンヘンのカトリック教会の映像：淡い壁画、パイプオルガンが聖壇の後ろに これはドイツの教会の内部のひとつのスタイルとのこと。

ドイツの教会の働き

パウロ教会の礼拝堂と教会会館：幼稚園児~12,3歳が出演するミュージカルを上演。南先生の感想として、一方でドイツの子供たちの音楽センスに驚き、他方でなぜ教会でこれほどレベルの高いミュージカルが必要かの疑問(障害をもった子供、うまく歌えない子供たちも参加できる音楽会であればいいと思うのだが、上手さが優先される現実への)も呈されました。

ボンヘッファー(Dietrich Bonhoeffer、ドイツ・ルター派の牧師。20世紀を代表するキリスト教神学者の一人。

### J. S. バッハ 教会音楽の午後

第19回荻窪音楽祭参加

[日時] 5月17日(日) 15:00 開演

[会場] 荻窪教会(日本キリスト教団)(ちらし地図参照)

- ・カンタータ第8番(み神よ わが死はいつ)
- ・宗教歌曲集より
- ・カンタータ第131番(深みより 主よ われはなれを呼ぶ)
- ・ミサ曲抜粋

[演奏] 光野孝子(ソプラノ独唱)

若松純子(フルート)、金澤亜希子(オルガン)

大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団

[主催] 「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会  
荻窪教会

入場無料(ただし、席数に限りがありますので、お早めにご来場ください。14:30開場)

第二次世界大戦中にヒトラー暗殺計画に加担し、ドイツ降伏直前の1945年4月9日、収容所内で刑死の先祖が16世紀に牧師として仕えていた教会の写真。

パウロ教会の礼拝堂の様子：夏休みの8月のある日の映像では、礼拝5分前でもまばらな人数 熱心な日本のクリスチャンから見ると衝撃かもしれないが、ドイツ人はそれほど毎週教会に行くことを厳守しない傾向とのコメント。統計では登録メンバーの4%が礼拝に来るということで、4000人の会員数に当てはめると通常150人（夏休期間40人）で、ほぼ現実合うとのことでした。

ヨハネ教会（隣にあるプロテスタント教会）の様子：ドイツのクリスチャンが礼拝をそれほど重んじない 毎週は礼拝に来ないからといって、信仰がないことではない たとえばディアコニー（社会福祉）の領域で教会の果たす役割が大きいことを示す映像として紹介されました。ここでは、毎年、1,2月の期間、教会を毎日開放して、900～1000人ほどの人々に昼食を提供。また、ホームレスを含めて犬を連れてくる人がたくさんいるのは驚きでした。予防注射代（約8000円）を払えない人のための福祉ともなっています。

集会：ナチスの時代、シュトゥットガルトからも多くのジプシー（ロマ）の人々がアウシュビッツに連れて行かれたことを覚えて、その人たちが住んでいた家のそばで毎年集会や平和の行進が行われているそうです。

演奏奉仕：教会聖歌隊や吹奏楽の奉仕をする姿が見られる 会員以外、礼拝常時出席者以外にも奉仕をするチャンスを与えているのがドイツの教会。

礼拝出席者が20～30人の村の教会：1週間にわたり、朝9時から夕4時までお年寄りのための催し物を計画。

「旅行かばんを持たない旅行」という企画：事情で海外に行けない人のために、海外の留学生などを招いて話をさせる企画。

等々、多彩な映像とお話しを楽しませていただきました。

また、この日は、日本キリスト教団荻窪教会の小海基牧師にもおいでいただき、テノール声部に加わって歌っていただくと共に、5月17日（日）に同教会で行われる特別演奏会についてお話しいただきました。近年、目白では「目白音楽祭」が開催され、合唱団の練習会場である聖公会も会場のひとつとなっていますが、荻窪ではその先駆となる「荻窪音楽祭」が19年前から毎年開かれており、今回の演奏会もその一環とのこと。バッハ合唱団による演奏への期待を語っていただきました。

加えて、ちょうど、フライブルクのバッハ合唱団員で来日中のレアンダー・ピンデヴァルトさん（B）とジモーネ・ヴァルドリヒさん（S）が練習場を訪れ、質問コーナー的な場もできるなど、多彩な内容となりました。

その後、おなじみの中華の店「揚子江」にて、両先生らを囲んでの会食、歓談の時がもたれました。



上左：レアンダーと南牧師 上右：小海牧師  
下：背中がジモーネとレアンダー、「揚子江」にて  
（写真提供・筆者）



個人的には、この日の企画を通して、5月の特別演奏会と8月のドイツ演奏旅行が、それぞれ素敵な現実としてイメージされ、そこに向けての思いを新たにされたことは大きな収穫でした。演奏する者にとって、演奏の場があり、耳を傾けてくれる人々がいることのありがたさは言うまでもないことですが、そのための準備がどれだけ大変かは、慣れた場所と馴染みのお客さまがある程度いるという条件においても日頃感じさせられていることです。まして、外部からの演奏者となれば、その迎え入れの準備がどれだけ大変なことで、どれほど稀有で価値あることかについて、私自身これまで十分に考えず、与えられ整えられた状況に甘んじて、演奏の機会を享受して来たことに気がつきます。

「教会で、海外で、その音楽発祥の地で演奏できたらいいね」と夢を語ることはできても、それが実現することはまれ 時、人、想い、行動、支援... 様々なことの共鳴があって道が開けるものでしょう。「そのうち、どこかで」というほど好機は安易に転がっているものではない

今のこの機会を活かしたい そのような思いが、お話しを聞きながら確固たるものになってきました。素晴らしいバッハの音楽にふさわしい得がたい機会を最大限に活かしたい そのためにも、作品自体とその背景への理解を深め、入念に活力ある練習をし、冷めた壁を一步突き抜けた演奏ができればと願い、期待しています。本来想定されていた教会という場で歌うこと、またバッハの音楽の発祥の国で、その文化、空気の中で、想像を超えた豊かな響きの空間をもつ会堂で歌うこと自体が、それを大きく支えるものと思います。（団員：パス）

# ■ 漱石 交流 ■

去る3月、思いついて、コピーの切り貼りで「夏目漱石書簡集から」を拵えました。経緯は前書き(下記)に記したとおりです。

東京パッハ合唱団創立47周年の記念に

今年の7月1日に創立47周年の記念日を迎える私たちは、その後、来たる8月7日から16日に、第5回ヨーロッパ演奏旅行に出かけます。

前代未聞の世界不況に襲われたこの時期に、果たしてこの企画が実現できるのか、と憂慮されましたが、合唱団員の熱意とご支援くださる多くの方々のご厚情により、広い層から多額の資金も集まり、予定通りに進行できそうな見通しとなってきています。

応援して下さったみなさまに、旅行後には、現地での演奏録音のCDなどをプレゼントできればと思っておりますが、創立記念に際しても、とりあえず、このご協力への感謝と、今後につづくお励ましのお願いの気持ちをこめて、何かさやかな記念品を、と考えていました。

最近、たまたま、古い「夏目漱石全集」(昭和28-29年創藝社刊、大村の父の蔵書)を、ゆっくり読み通す機会を得た私は、その第10巻書簡集を前にして、あまりの龐大さ(2095通)に圧倒され、拾い読みで済ませようかと思いましたが、読みはじめてみると、とても興味深く、漱石が接する一人ひとりに、多様な配慮と愛情をもって書き分けているのに感動しました。明治23年(漱石23歳)から大正5年(没年、49歳)まで年代順に配されたものを、宛て先きの一人ごとにまとめて、ほんの一部分であっても、じっくり味わってみたいという気になり、29人の対象者にしぼり、切り貼りで編集しなおして、読みました。

私個人の選択で、あまり客観性はありませんが、これをきっかけに、漱石の書簡から、その創作を裏づけるドラマティックな友情の記念碑に、みなさまも接していただきたく、いささかパッハとは縁遠いようですが、これをプレゼントさせていただくことにします。

心から心へ、この人間最高のコミュニケーションは、パッハでも、漱石でも、変わるものではありません。とくに、日本の近代から現代への激動期に生きた、漱石のこまやかな心の動きは、2009年の、新しい激動のただ中に佇む私たちの心に、大きな暗示を与えてくれるように思われます。



多くの方が感想をお寄せくださいましたので、右に感謝をこめて、ご紹介をさせていただきます(順不同)。  
なお、「漱石書簡集から」は、若干の残部がございますので、ご入用の方にはお送りいたします。ご連絡ください。(大村恵美子)

漱石水彩画(部分)

秋田 稔(団友)

春間近かです。いつも月報、貴姉のお書きになったもの、ご友人のご本のご感想など、どれをお読みしても、同感、深い感懐をうけます。「漱石書簡集から」も興味深いものでした。

天羽喜久子(主宰者高校級友)

先日は「漱石書簡集から」をお送りくださり、ありがとうございました。ちょうど江藤淳の「漱石とその時代」を読み終えたところで、書簡もいろいろ載っていましたので、その偶然におどろきました。あらためて、漱石の奥深さや、その葛藤に思いをめぐらせております。ヨーロッパ演奏旅行、どうぞお元気で、ご成功をお祈り申し上げます。

小田島雄志(団友)

「漱石書簡集から」どうもありがとうございます。このような形で読むことができましてはあわせです。

佐々木まり子(団友)

一度には読みきれませんが、折りにふれ2、3通と、いろいろ想像しながら読んでおります。小説とはひと味ちがう、その人の生の姿がグッと私たちの側に近づいてくれる思いがいたします。私も大村先生から頂戴するおたよりにいつも励まされ、力をいただいている者として、「手紙」の暖かいパワーを信じます。

瀬底恵子(後援会員)

漱石のお人柄にふれることができ、愛情深く、あたたかい友情に感動いたしました。ちょうど両親の青壮年期の時代の書簡であることに、いっそう親しみと楽しさをいただきつつ、読ませていただき、思いがけないプレゼントに心より御礼申し上げます。8月のご旅行がどうぞ祝福されますように。

天田 繫(団友)

漱石の生身の生きざまから生まれた、生活のことばに親しみを感じるところが結構あり、たいへん興味深く拝見しています。ゆっくりていねいに読むべき、と焦らずに...。短い文章もことばの紡ぎ方のセンス、磨き方の熱心と向学心?! に一流の風格を漂わせて、さすがと膝を打ったりしています。と同時に日本語の平易でありつつも味わい深いものが...人をひきつける力、自分の老いていく姿を人に率直に話して面白い...と思います。人間味あふれているところは抜群です。

もう一步。あなたのコインで、演奏旅行に送り出してください。

2009年3月31日現在

【ヨーロッパ演奏旅行募金】	1,468,000円(目標300万円)
【楽譜出版協力募金】報告	6,618,000円(目標1000万円)

西村清志（後援会員）

「夏目漱石書簡集から」ありがとうございました。ぼくは当用漢字でずっと育ってきているので、昔からの漢字はまったく苦手でして、なかなか調子に乗れず、進まなかったのですが、一週間ほど前に朗読してみました。そうすると漱石が肉声で語りかけてくるような感じになり、これですっかりリズムができて、たいへん面白く読み終えました（もっとも候文と漢詩はダメでしたが）。ぼくのイメージでは、漱石は気むずかしくて皮肉屋だけれど、ユーモアと機知に富む、ちょっと貴族趣味の文豪でしたが、実際はたいへん面倒見のいいやさしい親分肌の人物であったことは意外でした。しかし怒る男であったことは確かでした。彼がもっとも嫌ったのは、“卑俗”ということではないかと思えます。とりわけ外国がぶれには我慢できなかったのではないのでしょうか。彼のオーバーともいえるイギリスやロシア嫌いの一因はその辺にあるように思えます。彼がもしこの“卑俗”あふれる現代社会に生きていたら、朝から晩まで怒りまくっていることでしょう。これからも折々に朗読してみようと思っています。元気をもらえそうな気がします。

花井鉄弥・友子（後援会員）

貴重な夏目漱石書簡集を丹念に編集、お送りくださりまして、望外の喜びでございました。文豪の偽らざる心深き内面をうかがい知ることができまして、大変に興味深く読み通してしまいました。... 門下生、友人としての交流に、心の底からはげまし、いたわり、忠告、叱正が文中紙背に読みとれ、人間としての付合いはかくあるべきものかな、と感じ入りました。見識鋭い批評眼、ユーモアを交え、簡素な文体に漱石の人柄がうかがえて惹き入れられました。...

村井範子（団友）

学生時代の私の友人、松岡陽子・マックレインさんが4月にアメリカから来日しますので、そのときに差し上げたく思っています。漱石長女の筆子さん、漱石門下の松岡譲夫人のご長女（漱石のお孫）です。いま私の手許にある彼女の近刊『漱石夫妻 愛のかたち』（朝日新書）を読んでいただければと思い、同封します。この夏の演奏旅行、よい、素晴らしい旅行になりますよう、お祈りしています。あなたからいつも“元気”をいただいております。いつもいつもお元気で！

渡邊 明（顧問）

過日ハンガリーに「虎月伝」公演のために行っていました。長い飛行機の中で「漱石書簡集から」を読ませていただきました。漱石の作品の背景が納得され、また漱石のロンドン滞在中の姿がうかがえ、大変興味深く、ここに御礼申し上げます。合唱団の訪欧の御成功と御発展をお祈り申し上げます。

宮田親平著

『毒ガス開発の父ハーバー 愛国心を裏切られた科学者』

昨 2008 年、科学ジャーナリスト大賞受賞として、この本が新聞などに報道され、その著者が、私たちの合唱団の初期からのご熱心な後援会員でいらっしゃるの、さっそくお祝いのごあいさつをお伝えしようと思ひ、とにかく本を買って読んでみなくては、と心はやりました。ところが、当座の重なる雑用にとりまぎれてそのままになっていたのです。よくあることなのですが、たいへん心外なことでした。

このところ、8月のヨーロッパ演奏旅行へのご協力の感謝とお願いをかねて、後援会員の方々にお届けした「夏目漱石書簡集から」に対して、次々と応答をお寄せくださる方々があり、宮田親平様からも御著書をご恵送いただきました。

私（大村）は拝読して、昨年読み忘れたのはむしろ不幸中のさいわいで、現在この時点で、この内容に接したおかげで、ユダヤ人問題のごくアクティブな実態がわかり、現代の紛争へのグローバルな理解に役立ち、まったくしづとい人間の業<ごう>というものを、痛感することができました。

ひとりの複雑な科学者の歴史を追って、<平和時には人類のため、戦争時には祖国のため>という、古今あるいは将来までも変わらないかもしれないやりきれなさが、よくわかります。「ユダヤ系の科学者を追放することは、ドイツから物理や化学を追放することだ」と言われたヒトラーが、「それならこれから百年、ドイツは物理も化学もなしにやっぺいこうではないか」とうそぶいたとか。

宮田様は、あとがきの中で、こう書いていらっしゃる。「20世紀は前半が国家主義、後半が科学技術の時代であったように思われます。そして病的な国家主義に科学技術の進歩が結びつくと、どういう悲惨なことが起こるか。このことはわれわれ日本人も痛切に知っていることですが、さらに人類の科学技術の発達もたらした過剰な生産活動が、地球全体を危うくしていることは、これまたいまや多くの人々が知っている通りです。<世界のすべての知的な人びとは、災厄が迫っていることを知っているのに、それを防ぐ方法を知らなかった>（H.G.ウェルズ）」

著書のカヴァーより内容紹介を一部拝借します。

第一次世界大戦下、史上初の毒ガス戦がヨーロッパで繰り広げられていた。ドイツ軍で毒ガス開発の指揮をとったのは、のちにノーベル賞を受賞したユダヤ人科学者フリッツ・ハーバー。友人のアインシュタインからは「君は傑出した科学的才能を大量殺戮のために使っている」と言われていた。自身も科学者であった妻クララは夫の殺人兵器開発に反対し、自ら命を絶つ。...

（2007年11月、朝日新聞社刊、朝日選書834）